# 明治聖徳記念學會と加藤玄智

## ――學會創立前後を中心として――

本

士

はじめ

ことは周知の事実である。加藤の業績には、宗教学を用い 考究のみならず、 た神道研究を中心に国体論・生祠研究・国家的神道論等の の学績により神道研究者としてクローズアップされてきた 人物であり、 教学者加藤玄智が、明治聖德記念學會創立に携わった中心 倫理會とならび、 本宗教學會、神道學會、亞細亞協會、日本文化協會、丁酉 本文化・神道・宗教に関わる当時の学会・協会として、 關係深キモノ」を摘録した『全國學會協會要覽』には、 會其ノ他、團體ニシテ學術ノ進歩發達並其ノ應用ノ增進ニ 加藤については、田辺勇、梅田義彦、 和十二年、 啓蒙書・修養書の著述等幅広いものがある。 同學會研究所所長として活躍した大正期以降 日本學術振興會が「我國内ニ於ケル學會協 明治聖徳記念學會が載録されている。宗 欧文の神道研究発表、神道書籍目録刊行、 小林健三、田丸 日 Н

を明らかにするための一試論である。 本稿は加藤が心血を注いだ明治聖徳記念學會の実像の 治聖德記念學會會報』二、大正二年]からも推察されるが、 う。その理念は、左に掲げる明治聖徳記念學會|趣意書][『明 上に、研究の意図と趣旨を解明することにつながるであろ も再考しなければならない。それは、加藤の学的方法論以 分が明治聖徳記念學會の事業として行われたことについて 化の啓蒙と海外への発信を目標としていたこと、その大部 着目すべきであろう。しかし、それ以上に、 る神道研究としては戦前唯一のものであることには改めて において避けては通れない業績であること、宗教学者によ 戦後の「国家神道」論まで影響を与え、「国家神道」 究などがある。中でも、加藤の「国家的神道」概念構築が 均に代表される戦前「国家神道」論の先駆としての業績 上田賢治、 島薗進等による学説・ライフヒストリーについ 中村生雄等による学的方法論の検討、 加藤が日本文 ての

明治聖德記念學會趣意書

精確 ては、 大成せられざるべからざるものなりと、 可なく、眞に我れに在りては他山の石に外ならずと雖 探らんと欲して先づ武士道を研究し進みて神道の攻究 個に微々として振はざる識者の夙に認むる所、 ものあり、 民思想の淵源を成せるもの多きを觀取しその科學的に に及び、 渉關係又は我が獨特なる國體武士道の由來等に潜むる と茲に年あり、 あるのみなれば、 に惟へらく、 の下晏然他人の鼾睡を容る、に忍びざるものあり、 に從事する者日に多きを加ふる現状に接見するに至り に入り延きて佛教儒教等我國の諸有精神的文明の して外人が日清日露の て自ら任ずると同時に又日本宗教の研究に從事するこ 日も缺く可からざる所以を感ずること頗る痛切なる 畢竟日本を真に能く理會し得るものは獨り日本人 はなる研究が又現代國民の自覺忠君愛國心の涵養上 事に斯學の研究に從ふ者、徒に苟苴偸安、 夙に世界の諸宗教を科學的に攻明することを以 是等日本の教學殊に神道が我が建國 而て我邦に於ける是等教學研究の大勢は眞 彼れ外人の日本研究に熱心なる固 深く思を神道及び神道と儒佛二教の交 日 本 研 兩戰役以來我が戰勝の眞原因を 究は 日 本人の手に由 矧や明治維新 りて當然 の大本國 之に反 [より不 研 窃 鐟

を捧ぐ、

是

れ我等亦聖帝洪

恩の萬

一に酬

13

奉らんとす

る微衷、

に新に明治聖德記念学學會なるものを組

ば、 初め、 あり、 所、 こと期して待つ可きなり、 彼我意志の疏通を計る上に於ても、 道徳の涵養上に亦陸海軍人の精神教育上にも資するも 餘弊に苦みつゝある現代思想界の動揺を救治し、 代の知識に照して考覈闡明することを得ば、 研究を遂げ、その由りて來る所以とその眞價とを、 成せるものゝ するに至れり、この秋に當りて、 み學びて、 特色とを忘失せしめ、 經濟事情の激變とは、 0 ひ奉り全國民を擧げて仲々の至情禁ずる能はざるも の決して鮮少ならざるべきは、 して、 0 餘勢、 開國と與に、 之に由りて日本に關する外人の誤解を氷釋せしめ 斯くしてその研究結果は、 儒佛の二 知らず識らず我が建國思想の大本と、 「賤老少各その分に應じて爭ひて、 我が領土の擴大に伴へる交通往來の頻繁と、 以てその物質的文明の餘毒に酗せられ 神髓と特色とに關し、 教等に至る迄、 俄然襲來せる外來思想の影響と、 輕佻浮薄、 現代思潮の産兒たる青年子女を 時偶々明治聖帝 以て之を海外に紹介せ 我等の信じて疑はざる 凡て我精神的文明を構 我が神道・武士道を 歐米思想の皮相をの 亦多大の實効ある 科學的に精確 哀悼の 0 今やそ 國民性 登遐に遇 なる んと 玥

きを思ふ、偏に内外有志の協賛を仰ぐ。 に、外に向ひては、その研究結果を内外文の紀要に公 に、外に向ひては、その研究結果を内外文の紀要に公 にでるの一助たらしめんことを切望して已まざる所以 に至るの一助たらしめんことを切望して已まざる所以 に至るの一助たらしめんことを切望して已まざる所以 なり、我等固より淺學菲才、徒に任重くして前途の遠 なり、我等固より淺學菲才、徒に任重くして前途の遠 をして、彼れ外人をして我日本の精神的文明を研究し

含まれている。

その評価を毀誉褒貶させたことも事実である。 道論により誤解された形で神道指令に影響を与えたことは としての「国体神道」概念が形成されたのであろう。 的文明とを対置させたとき、「国家的神道」の精神性の核 書」にあるとおり、 思想の大本と、國民性の特色」をも明らかにする目的に沿っ が外人の日本研究によっては明らかにされていない「建國 加藤玄智が「国家的神道」論を確立したことからは、それ 日本の精神的文明の核を内外に知らしめる加藤の学的努力 たものであったことが推察できる。だからこそ、右 精確なる」日本研究の一環として神道研究に着手した結果 の明 はからずも加藤に影響を受けたD・C・ホルトムの神 治聖德記念學會趣意書にあるとおり、「科學的に 加藤に影響を与えた人物の思想をなぞれば、 大正元年十一月三日明治聖帝天長の大節に於て 日本の精神的文明と、欧米思想の物質 その歴史的 しかし、 「趣意

であった加藤玄智の業績は改めて再検討されるべきものが道筋は、時勢において自然なものであり、真摯な学究の人が研究対象とした宗教・神道の枠を超えて国体論に至った

# 党動句 明治聖德記念學會設立以前の加藤玄智と研

向を見る前に、 備期間があったゆえの満を持した精力的学会活動 藤が前掲趣意書にある内容を構想した時期であり、その 治聖德記念學會」が設立される以前 密接に関わる神道研究を推進する位置に存在してい えた田中義能がいた。そして、加藤もまた、国民道徳論と 主導的論者であった井上哲次郎は加藤の学問上の師であ 場し、家族道徳が鼓吹されていた。中でも、 として、明治四十一年、 想による社会問題に困惑していた。その解決方法のひとつ 的地位向上の途上であったと同時に、 神道研究を志したが、当時の日本は、 った。 明治聖德記念學會設立以前、 同じく井上門下として、国民道徳論の中心に神道をす それゆえにこそ、 加藤にとっての日本文明論・日本研究の姿 国民統合のための国民道徳論が登 その活動拠点としての学会の動 明治三十八年前後に加藤は の明治四十年代は、 経済的困難と左傾思 日露戦勝による対外 国民道徳論 の展開 加

期から大正・昭和戦前期における日本文化論の一つの潮流点を探ることにもなるであろう。そして、それは、明治後勢・背景を、学会設立以前に遡ることは、その趣意の立脚

を探る手続きとしても有効なはずである

であり、 米人により「日本研究のため」に設立された国際民間団体 明を科学的研究によって公表するという視点の根拠が説明 それが「加藤神道学のいわば結晶核となった」としている。 相を究め得て、 所感を述ぶ」[ 意味を鑑みる必要があろう。 所属していた「日本アジア協会」に、姉崎正治、 カディオ・ハーン、ダニエル・クラレンス・ホルトム等も ル できない。その根拠解明には、 しかし、それだけでは加藤が世界に対して日本の精神的文 の思想に大きな転回をもたらすきっかけとなった」とし、 方向性を定めた契機について検討してみたい。 明治天皇の死去と、それに続く乃木希典の殉死は、 、・チェンバレン、アーネスト・メーソン・サトウ、 まず、 服部宇之吉、鈴木大拙等とともに加藤玄智が在籍した ウィリアム・ジョージ・アストン、 加藤が明治聖徳記念學會において目指した研究 あらゆる世界の宗教と比較研究の上、 『神社協會雑誌』、 神道即ち我が國道の光輝を世界に発表した 加藤の「神道の研究に關して 明治五年横浜在住の在 明治四十三年一月]には、 バジル・ホー 島薗進は 新渡戸稲 其の真 ラフ 旨欧

> ない」とある。 (8) 派に宗教學的見地より研究の勞を取られたものが少なくはいのである。西洋人にあつては既に此の點に着眼して、立

of Ancient Matters" 明治十六年]を出版し、文部省編 降、 に、 理主義者協会の雑誌にて、 佐々木信綱などがいる。明治四十五年一月、ロンドンの合 弟子には、 終離日後、 帝国大学博言学(言語学)科講師となり、明治四十四年最 局教科書編輯係を勤め、 日、その十年後には『古事記』英訳 ["Kojiki" or "Records らも窺われる。チェンバレンは、英国に生まれ明治六年来 る天皇神位の歴史性を証明することを志したことが著作 思想の本義』[明治四十五年]の中で述べた。この論文以 実を基礎として立論していく必要性があることを『我建國 治四十四年」が発表された後、 バジル・ホール・チェンバレンの論文「新宗教の発明」[ 英・独・露等の知識人が関心を示し反響を呼んだ。それは、 このように、 科学的方法に由つた新研究に基づき歴史的に精確な事 加藤は、宗教学的方法論をも駆使しながら、近代に至 掲載されたことは、 スイスのジュネーブに住んだ人物である。 上田萬年、 加藤は西洋人の研究動向に着目してい 芳賀矢一、三上参次、 明治十九年から二十三年まで東京 チェンバレン論文「新宗教の発 その内容に対して日本のみなら その見解に対抗するため 岡倉由三 たが、

others" 6th ed. 昭和十四年] において、タイトルが「武 connected with Japan, For the use of travellers た新研究に基き精確なる事實を基礎として立論し、何人も …かう云ふ誤解や見あやまりがあられて、それがそのまま く、武士道をも日本の官僚が外人用に作り出したとするも 文は、天皇崇拝を官僚が作り出したとする批判だけではな 士道」とされて「新宗教の発明」は副題となった。この論 た。そのチェンバレン論文は、後に『日本事物誌』第六版 も立てて來なければならない。」(二一頁~二七頁)と記し いやと云はせぬ所を捕へて立ちその根柢から忠君愛國説を くなつてしまふ恐れがある」として、「科學的方法に由つ 海外に紹介されては日本の眞相が彼國の人に十分分からな 分日本を理解出來ぬ所がある様にも感ぜられる。… (中略) ある外人であるけれども、どうも外國人の悲さには、尚十 『我建國思想の本義』において、「日本語も出來日本に同情 の先駆であった。加藤は、このチェンバレン論文に対して 論であり、日本の国体を批判した戦前欧米「国家神道」 まったく新たなものである。」とする今言う「伝統の創造. ない。…(中略)…二十世紀の忠君愛国という日本の宗教は 新しき宗教であって、もちろん自発的に発生した現象では 「天皇崇拝および日本崇拝[忠君愛国教]は、その日本の "Things Japanese, Being Notes on various subjects

> ための學會設立の構想が出現した。 た日本人は多かった。このような状況下、日本研究推進ののである。この完全な国体批判に対して、不快な念を持っ

からざるものあるの實状と相成申候」等の言が見える。これ外人の邦人に勝るものあるを出さんも未遽に測り知る可形勢を以って之を推すに将来神道の精確なる研究は却て彼ちて神道の科學的研究に向かはしむるに至り随ひて現下の

明治聖徳記念學會設立にあたっての趣意

れらの言からも、

なり、 を当てて論題としたものはほとんどなかった。ただし、小 會が生まれたことを回顧している。これらの言によって、(3) という話が出て、大正元年の十一月三日に明治聖徳記念學 御の砌、 れたことにも窺われる。そして、明治四十五年明治天皇崩月になって初めて東京帝国大学文学部に神道講座が設置さ 洋的学術研究が非常に重要でありながらも存在せず、 明治四十五年以前から述べていた。日本人による神道の西 書にある学的問題意識が崩御後突然降って湧いた類のもの 林健三による、 念學會の創立と運営に関わったということ以外、 総てさういふものを根本材料」にしていくことになった。(4) 神道等と合わせて「日本の儒教、佛教、文學、美術、 研究内容は、外人が興味を持って研究しつつあった武士道、 していくというスタンスに定まったことが窺われる。 研究の方向性は、外人の研究に刺激を受けたことが契機と 上げるといふことも大變相應はしいことではなからうか」 のことを真に學術的に研究する學會の事業に依て御記念申 を示唆し啓蒙すべきだという見解の先見性は、大正九年九 ではないことが確認できよう。このような言を加藤玄智は なお、これまでの加藤玄智研究においては、明治聖徳記 日本人にしかできない日本精神文明の学術的研究を 「先帝陛下の御記念事業としては、さういふ日本 昭和五十年五月十六日國學院大學大講堂に 直接焦点 それ

> る一 ŋ 玄智及び戦前の明治聖徳記念學會の活動草創期に焦点を当 の現在に至るまでの歴史的概観と、その中心であった加 は、それらの資料をも参考にしながら、明治聖徳記念學會 事務所で使用したものであり、貴重な資料である。 以降の の『明治聖徳記念學會紀要』第一巻~第六十巻、 念學會事務所が置かれている明治神宮教学研究センター 恩に連なった方々も少なくなった今日、現在の明治聖德記 その実際を記すことを困難にしている。さらに、 學會の事務所が戦火により消失したことは、 和五十一年]には、その沿革がやや詳細に述べられ 参考とすべき点が少なくない。翻って、 現在において 本稿 加年 の学 てお 昭

### 明治聖徳記念學會創立と変遷 の 概

てて叙述する。

にて財團法人明治聖德記念學會となった。「本學會沿革略 節に於て」明治聖德記念學會は発足し、 よそ三ヶ月後の大正元年十一月三日、「明治聖帝天長の大 本學會設立二十年小史』「明治聖德記念學會 明治四十五年七月三十日に明治天皇が崩御され 同九年三月六日付 昭和七年 てからお

加藤は、 智の小石川の自宅が戦火で消失したことで、一 三十数年間継続したその盛んなる学会活動も、大東亜戦争 に着手し順次他の方面に及ぶものとされてい 二日本佛教ノ研究及ヒ神佛ノ研究及ヒ神佛の交渉關係ノ史 る。 九月」によれば、「 岡県御殿場市東山 激甚の影響により、 的研究」「(三) る多様な内容を含み、 月の講演会、各地の公開講演会、各種単行本発行などに渡 その学会活動を内外に知らしめた。 正三年の第一巻から昭和十八年の第六十巻まで発刊され、 海外にも紹介することを目的とせる日本學會」とされて ては其の研究結果を外國文を以て発表し、以て眞の日本を ひては我が邦人の自覚を喚起せしめると同時に、 の進歩せる批評的方法に拠つて、 ,本源タル神道ノ研究」「(二) その機関紙としての 昭和二十年に明治聖徳記念學會研究所を兼ねた加藤玄 御殿場の学労窟において、終戦を迎えたのであった。 二千有餘年の我が國固有の精神文明を、 加藤は、 他の方面に及ぶものとされている。しかし、武士道ノ過去現在及ヒ将来ニ關スル研究 その著書『日本精神と死の問題― 山莊 明治聖皇不朽の聖徳を永遠に記念せん 昭和十九年に避暑研鑽の場であった静 研究所における研究は「(一) 皇道 「学労窟研究所」に加 『明治聖徳記念學會紀要』は、 日本ノ教學 根本的に究明 活動内容としては、 (儒、 藤玄智が隠棲 旦途絶えた。 佛、 外に向ひ 現代學術 内に向 道 毎 大

> した。明治聖徳記念學會は、(ワン) 軍 ことと合わせて、 宅であったこと、その活動が制限される時代背景であった 學會「會則」に「東京市小石川區丸山 休会となってしまっていた。これは、大正九年三月制定 困難な状況であるだけでなく、その経済的基盤の消失・ 少しも衰えず、 市の東山学労窟研究所において「博士の精進常楽の意気は 白内障による視力衰弱のために不自由な状況の中、 けた。かつ、そのような経済的困難に陥っただけではなく、 あったために公職追放され、一時恩給停止などの処置を受 方明治聖徳記念學會」とある通り、 務所喪失の痛手・時局の転換等も重なって、 て、秘書役をつとめた杉浦千代女史に口述して著述に精進 宮参詣 が占領軍の当局の忌諱にふれたこと、 の死を中心として―』[ 記と敬神尊皇』[ 東西古今の書物はその頭脳の中に収められ 経済的 困 大東出 内 難が学究活動に及ぼした影響が . 閣印 加藤が御殿場市にいて身体的 刷局 版 その本拠 .町十一番地 昭和· さらに陸軍教授 昭 和十五年 地が 終戦後、 应 加 加 御殿場 藤玄智 藤玄智 太

は月例講話として百五十回以上継続した。終戦後、休会状士山信仰などの著作等に結実し、加藤中心の集い「藤玄会」

であったが、

大きかったと思わ

れる

しかし、明治聖徳記念學會としての活動こそ休会の

)状況

加藤個人としての研究は、乃木聖雄信仰

要な転回点であったと言えよう。 業こそが明治聖徳記念學會と明治神宮とが結ばれる契機を 十八年十一月付で刊行されていることからは、その刊行事 でありながら印刷半ばで停頓していた『神道書籍目録』続 代表して宮川仁藏理事がその意のある所を申し入れ、種々 明治神宮に献じて、 においても重要な意味を持つことを発信する場となるので プがあってこそ、学術研究の進展もあるということの証左 にとどまらず、精神的・人的あらゆる方面からのバックアッ 体が結ばれ、より強固に聖徳を仰ぎ記念していくための重 治天皇の聖徳を仰ぐという共通の創立理念を持つ二つの団 つくった要因であったことが推察される。それはまた、 編の刊行事業を明治神宮で引き継いだこと、それが昭和二 八年夏のことだったことがわかる。そして、戦前刊行予定 **榮に浴することが出來た。」とあり、** 遂に明治神宮幹部を代表せる伊達巽權宮司に、記念學會を 記念事業たる本會を長育して頂くにしかずとの結論を得 る昭和二十八年九月付「序」によれば、それは、「本會を 後に明治聖徳記念學會の意図したところが現代 本夏に至つて、本會所期の目的通り納受の光 神宮諸事業の一つとして、明治天皇御 それは、経済的側面だけ 移行時期が昭和二十

あった。

には、 及徹底」を期する旨が述べられている。 出発点となった。その加藤玄智博士記念学会「創立趣意書 おく」と記されてあり、 の学術活動復興の重要な画期であった。その「会則」には ての『神道研究紀要』発刊がなされたことは明治聖徳記念 徳記念學會の流れをくんだ学会としての復興、 記念学会」が結成され、その名称は異なるものの、 を記念して、 一本会の事務所を東京都渋谷区代々木明治神宮社務所内に その後、 加藤の「生祠研究」の発展と継承、 加藤玄智は昭和四十年に没したが、 昭和五十年に藤玄会を母体に「加藤玄智博 明治神宮宮司を会長とする新たな 一神道精神の普 機関誌とし 没後十 明治 崽

加藤玄智博士記念学会創立趣意書

ことになりました。 を期するため、ここに世話人会は発起して、 さらに進んで博士が念願とされた神道精神の普及徹底 年を経過し、本年五月にはその十年祭を斎行すること 博士記念学会を組織 藤玄会を母胎として、 になりました。これを記念して博士が生前育成された 宗教学の権威加藤玄智博士が逝去されてはやくも十 生祠研究を推進するとともに 神道精神の拡充強化をはかる 加藤玄智

われわれは、なによりも博士の自由にして進歩的

眀

講演会を開くとともに、それらの結果を機関誌 発展させることを目標とします。従って厳粛な方法に 界の文運に寄与したいと願われた博士の遺志を継承し、 景としてわが神道の特性を発揮することによって、 神道研究の姿勢に学び、宗教学ならびに関連諸学を背 研究紀要」(年一回)に発表する予定であります。 してゆきたいと思います。このため、随時、 同学有志に訴えて、会員の研究を公開し、相互に切瑳 よる学術研究を推進して斯界に貢献するため、 研究会や ひろく

ご賛同とご指導を賜りたく、ここにごあいさつを申し 上げる次第でございます。 以上、本会の発足にあたり、本会の趣旨を述べて、

### 昭和五十年五月

記念學會事務局において運営され、 献する目途を掲げ、明治神宮教学研究センター内明治聖德 行等を通して、より広い視野に立つ日本文化究明に寄与貢 学会としての毎年の講演会、研究例会および紀要雑誌の発 展させるため、明治聖德記念學會に改称した。それ以来 さらに往年の明治聖徳記念學會のように活動内容を充実発 昭和六十三年十一月、 加藤玄智博士記念学会は 現在に至る。

藤玄智博士記念學會は、 昭和五十年五月宗教學の

治聖德記念學會發會趣意書

繼承發展せんと計畫した。先の明治聖德記念學會は ひ、その會の使命とし理想としたところをも積極的 營にも當たられた往年の明治聖德記念學會の名稱を襲 展を遂げるべく、博士が多年關係され、その實際的 本人、日本文化、神道を研究する學會へと一大飛躍 ここにひろく關連諸學を基礎として學問的に日本、日 員は努力して機関誌「神道研究紀要」を發刊したが、 博士の自由にして進歩的な神道研究方法を繼承し、会 の普及徹底を期することを目的として創立した。 るとともに、さらに進んで博士が念願された神道精神 成された藤玄會を母胎として本邦生祀の研究を推進す をされた加藤玄智博士の十年祭を機に、博士が生前 權威にして神道學研究に、また神社界にも大きな貢 運

緻にして畫期的な成果を擧げて次々と發表、内外より 文學、史學、社會學、法學、教育學等の各分野より精 以後その學會に研究所をも設け神道學、 外文にて廣く公表せんとして大正元年十一月三日設立、 究、その科學的透徹を計るとともにその研究成果を内 にも酬ひ奉らんとして、日本の精神文明を廣く深く研 明治天皇登遐のあと偉大なる天皇の御洪恩の萬分の もにその運營も困難となり自づと休止の状況に陥つた。 高く評価されてゐた。 しかるに大東亜戦争の敗北とと 哲學、

運営・展開の起点となった活動内容について鑑みたい。治聖德記念學會創立前後の時代的背景と、学会の創立から

本文化、神道等について内外より問われるとき、それ本文化、神道等について内外より問われるとき、それに應へるには廣い學問分野よりの綜合的研究が要求されるが、先の明治聖徳記念學會の理想としたところもそれであり、ここに加藤玄智博士記念學會を充実發展それであり、ここに加藤玄智博士記念學會を充実發展し、改めて日本、日本人、日いま、日本が大きく發展し、改めて日本、日本人、日いま、日本が大きく發展し、改めて日本、日本人、日いま、日本が大きく發展し、改めて日本、日本人、日

## 昭和六十三年十一月

う、 徳記念學會は明治神宮を拠点として再出発したが、それぞ に、先の戦前における明治聖徳記念學會の理想に近づくよ 二月発行の紀要で四十二号を数えた。これまで寄稿された せるにも必要な視点であろう。よって、次に明治神宮と明 れの創立に関わる初発の意図と動向などを比較考究するこ の結晶と言えよう。このように、戦後においては、 新刊紹介・随想等も交えてより充実した構成となる。まさ 画期的論文が並んでいるのみならず、四十三号からは書評 論文は神道学・宗教学・文学・史学・社会学・教育学等の した後の明治聖德記念學會復刊紀要は、既に平成十七年十 右のような趣意の基、平成十八年十月現在、新たに発会 戦後の歴代の編集委員・事務局が積み上げてきた努力 創立当 |時の状況と、今後の学会の方向性を考え合わ 明治聖

## 二 學會創立と加藤玄智

神社人もその記念事業について早々と議論したことが理解 いること等からは、その論が大正に移って早々に議論され いて」[『全國神職會會報』三三、第一六七号]を著して いる。そして、河野省三が大正元年九月に「明治神宮に就 展開」[平成十七年]等の論によって既に明らかにされて 現』[ 平成十七年 ]、佐藤一伯「明治神宮創建論の形 地選定について」[平成八年]、山口輝臣 立をめぐって」[平成五年]、大丸真美「明治神宮の鎮座 の創建と発展」[昭和四十年]、山口輝臣 であったが、その建設にいたる道筋は、伊達巽「明治神宮 とからも理解される。中でも、一番多かった案は神宮建設 種記念事業が有識者により新聞などで盛んに述べられたこ ものとして望まれたことは、神宮創建運動のみならず、各 明治天皇の崩御が国民により痛く惜しまれ悲しまれたこ 明治の御世を造りあげた御威徳が後世にまで残される 「明治神宮の成 『明治神宮の出 成

野においてその聖徳を後世に伝えることで「聖帝洪恩の萬さて、そのような哀悼の念きわまる気運の中で、学問分

されるのである。

からなり、学会研究所役員として所長・所員・書記及び会頭一名・副会頭・評議員若干名・委員及び書記会計若干名び公表による聖徳記念事業に着手した。その学会組織は、明治聖徳記念學會を組織して日本の精神的文明の研究およ 川・一、一、学会の学会組織して日本の精神的文明の研究およのより、一、一、学会研究所役員として所長・所員・書記及び会員というない。

であろう。 その学会成立の経緯においては、国民的感情としての天 とは、次のような創立時期の動向を見ればさらに明らか ことは、次のような創立時期の動向を見ればさらに明らか であろう。

會第一例會開催の件に關し諸般の打ち合はせを爲し散會せ宮川、加藤の三委員富士見町富士見軒に會合し、本會研究會報』二[大正二年]を見ると、「大正二年一月二十日藤崎、創立時期における活動内容として、『明治聖德記念學會

して最初の「會報」内容である。そして、第一回の「研究會」り。」という記事があり、それが管見では活動状況報告と ら、一日も早い研究所開設を希望する旨が述べられた。 究法により世に公にすることが急務中の急務であることか るとの話があり、陸軍少佐宮川仁蔵からは我国家観念忠孝 して意見を交換するのは大いに国家のために慶賀するに足 の事項」「國民道徳等の将来」「武士道神道等の研究」に関 太郎から各種異なれる職種の人員が一堂に会して「精神 年から貴族院議員、 し学習院教授・東京高等商業学校教授を歴任した(大正三 同年の明治三十二年に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業 泰治から会の趣旨に絶対賛成の意が表せられ、 れに対して、かつて中江兆民門下であった貴族院議員荒 會設立の急務」と題された加藤玄智の講演がなされた。そ は、大正二年三月十七日に四谷の藤崎邸にて開催され、「本 本の道徳思想皇室中心の日本主義を科学的に精確なる研 大正八年に東京帝大教授となる。)伯爵林博 加藤玄智と 界 井

おいて定められた。また、大正二年六月八日、九段偕行社一回位の割合に於て開催すべきことが第一回「研究會」に様子が窺われる。この「研究會」は、少なくとも二ヶ月にによって、明治聖德記念學會の活動方針が定まっていったこれらの「研究會」報告内容を見ると、この「研究會」

にて開催された第二回「研究會」においては、七・八・九

上哲次郎 T演内容については、 回が大正二年四月から始まっているが、第一回講演は井 東京において毎月開催された「月例研究講 Ħ 本文明 「日本文明研究の必要」、 研究機関の整備を促す―」であった。この 『明治聖徳記念學會紀要』第一巻[大 加藤玄智「先づ自己を [演會] は、 将田中義一など十八名に上った。

海軍中将八代六郎、

陸軍少

教、 て構成されていた。そして、会則(第三條)に「主トシテ作元八(歴史学)、林博太郎(教育学)と多彩なメンバーによっ 術講演」等が開催されたほか、 準備された。 内外ニ顕彰シ、以テ自ラ知ルニ努ムルト同時ニ、 精神ノ大本トヲ闡明シ、我カ國體ノ精華ト日本ノ文明トヲ 人文史的學問ノ新研究ニ照シテ本邦思想ノ特色ト我ガ建國 四回までの講演内容が掲載され、その講師も高木敏雄 明治聖徳記念學會の目指すべき指針が示された講演内容で 正三年二月十八日発行]にその大要が掲載されてい ムコトヲ期ス」とあるように、学術のみならず、 ノ眞相ヲ世界ノ學界ニ紹介シテ、 った。 文明、精神修養に至るまで、 鳥居龍蔵 第一回紀要には、 大正九年以降は、 (人類学・考古学)、芳賀矢一(国文学)、 月例研究講演會の第一回から第 各地の地方講演も行われた。 特別講演會として「通俗 講演内容も多彩なものが 彼我ノ精神的理會ニ資セ 日本文明 るが

遂行に着々と努力した結果に他ならなかったと言えよう。 文の単行本刊行等による地道な研究活動において会の なった。 家からの御下賜金を拝受し、褒章條令による公益団 宮内省を経て御手元金の恩賜を拝受しただけでなく、 このように、充実した内容で出発した明治聖徳記念學會 大正九年三月六日に財団法人組織となり、 これも、 創立以来毎月の講演会、紀要、 大正十 邦文 体と

究所の面々の協力をも忘れてはならないだろう。 口駒造、鳥羽正雄、研究嘱託の松下松平等を始めとした研あったが、研究所員であった星野日子四郎、長井眞琴、溝その研究の中心にあったのは研究所長としての加藤玄智で

### むすい

思われるのである。 代と理念を鑑みることが、 景を忘れてはなるまい。現代においても、その想いを噛み 求し尚古の気風を尊ぶ、国を想う人々に溢れていた時代背 応えた創立理念と明治聖徳記念の志に惹きつけられた人々 多くの異なる分野からの賛同を得たことは、 このように、明治聖德記念學會の学術的性格にも関わらず、 家、 重要であろう。だからこそ、 締めつつ、明治の聖徳を真摯に記念する精神の継承こそが の想いをも鑑みる必要があろう。何よりも、 起人たちの人脈が第一の要素と言えようが、時代の要請に て六百二十九名を数えた。その内訳は、学者、軍人、政治 昭和十二年六月二十日調の学会会員数は、法人登録を含め ちなみに、『本學會二十五年史』 [昭和十二年] によれば 神道関係者等さまざまな分野の人々で構成されている。 現代においても意義あることと 明治聖徳記念學會創立時の時 発会当時の発 日本精神を探

### E

2

- が九十団体、掲載されている。 緒言、二八頁参照。同書には、学会が百十五団体、協会(1)『全國學會協會要覽』[日本學術振興會 昭和十二年]、
- 善編 と成層圏の宗教』外篇「幽顯社 一八、五一九 [昭和二十八年]、田辺勇「学田拾穂 学神道研究室旧蔵書目録および解説』、東京堂出版 要』復刊第十六号[平成七年十二月、後に『東京帝国 學會紀要』復刊第十四号[平成七年四月]、島薗進 和六〇年〕、田丸徳善「加藤玄智論試稿」『明治聖德記念 津城寛文「加藤玄智―穏健中庸なる天皇教徒 『近代日本哲学思想家辞典』 [東京書籍 士記念学会 昭和五十三年五月]、日下部哲夫「加藤玄智 発達史観批判—」『神道研究紀要』第三輯 [ 加藤玄智博 『宗教学年報』二十一号「大正大学宗教学会 博士記念学会 藤玄智博士の学績」『神道研究紀要』第一輯[加藤玄智 新神道百年史』第四巻[昭和四十一年]、小林健三「加 昭和四十年]、戸田義雄「神道と宗教学の展開」『明治維 義彦「加藤玄智」『神道宗教』四一号[神道宗教学会 藤玄智博士・宗教研究の学系と先生の風格」『学校教育 見たる本邦宗教学研究の歩み」(上・下)『日本神学』五 加藤玄智については、田辺勇「加藤博士の業績資料より 藤玄智の宗教学的神道学の形成」『明治聖德記念學會 年 ]、上田賢治「神道研究の方法 —加藤玄智博士の 『日本の宗教学説』Ⅱ[東京大学宗教学研究室 昭和五十一年五月]、七沢賢治「加藤玄智 昭和二十九年]、 昭和五十七年」 —」田丸徳 昭和 Ŧī.

新田均「加藤玄智の「国家的神道」論」

- (3) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (3) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (3) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (4) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (5) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (5) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』 (5) 国体神道については、前掲『近代政教関係の基礎的研究』
- (4) D・C・ホルトムが「形としては加藤の神道の区分を採用しながら、「神社神道」と「神社神道」を短絡的にイコールとした」(大原康男『神道指令の研究』三二八頁)ことに起因する「神道指令」の「国家神道」概念と加藤の「国家的神道」概念が明らかに違うものであることは、の「国家的神道」概念が明らかに違うものであることは、の「国家でに指摘されている。ホルトムは、明治聖徳記念學會でに指摘されている。ホルトムは、明治聖徳記念學會の会員でもあり、學會研究所にも所属し、大正十年以降、の会員でもあり、學會研究所にも所属し、大正十年以降、の会員でもあり、學會研究所にも所属し、大正十年以降、の会員でもあり、學會紀要』に数本の論文も掲載している。
- (6) 烏薗隹・高喬亰・前川里子「屛兑」『加藤女習集』 育九巻、成八年、[東京堂出版 平成八年]参照。 成八年、[東京帝国大学神道研究室旧蔵書 目録および解説』平
- (7) ダグラス・M・ケンリック(池田雅夫訳)『日本アジアシリーズ日本の宗教学3[平成十六年]、十三頁。(6) 島薗進・高橋原・前川理子「解説」『加藤玄智集』第九巻

- 書刊行会 平成九年)。
  書刊行会 平成九年)。
  書刊行会 平成九年)。
  書刊行会 平成九年)。
- 治四十三年一月〕、五頁。(8)「神道の研究に關して所感を述ぶ」『神社協會雑誌』[明

9

とチェンバレンの「新宗教の発明」において、その歴史 チェンバレンの差であった。後に、ハーンの を畏敬することとした。それは情的なハーンと合理的 ンバレンは、宗教を抽象的教義の体系とし、ハーンは神々 たハーンと膨大な量の書簡を交わしたが、「宗教」 十四年]八七頁。チェンバレンは、明治二十三年来日 高梨健吉訳『日本事物史1』[東洋文庫一三一、 抗した。その後、チェンバレンの説は満州事変以後の天 玄智はハーンの忠義教に共鳴し、 に官僚によって創作された全く新しい宗教とした。 で復古であるとし、チェンバレンは明治二十年代を中心 を評して、 把握の差は如実に現れた。忠君愛国思想(忠孝・忠義 の見解の違いにより後にその関係に溝が生まれた。チェ ハーンは近代化の側面を認めながらもあくま チェンバレンの説に対 一神国日本 概念

文学研究』第四十七号『昭和六十年』、阿部美哉『宗教という(牧健二「西洋人の見た天皇制」『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二「西洋人の見た天皇制」『思想』第三三六号、という(牧健二」西洋人の見た天皇制』『思想』第三三六号、という(牧健二)の見た。

(10) 楠家重敏『ネズミはまだ生きている―チェンバレンの(元記―』『雄松堂出版 昭和六一年』参照。楠家重敏は、「チェンバレンが「新宗教の発明」を書くようになった動機はその前年の日本滞在時に経験した二つの大きな事件、すなわち日本の朝鮮併合と大逆事件に触発されたため」と推測している(五四九頁)。

学と大学研究』序章[平成十六年]等を参照。

- 『會報』[明治聖徳記念學會 大正十一年]。(1) 加藤玄智「財團法人明治聖徳記念學會の事業と其性質」
- の「第一章 東京帝国大学神道研究室」第一節参照。(12) 前掲『東京帝国大学神道研究室旧蔵書 目録および解説』
- (1) 同右。 [明治聖德記念學會 大正十一年]。 [明治聖德記念學會 大正十一年]。
- (15) 明治神宮と明治聖德記念學會双方を扱った論として、

阪

- 【弘文堂、平成十七年】がある。本是丸「明治神宮の創建と聖徳記念」『近代の神社神道』
- 會報』二[大正二年十月]四~五頁。(16) 「明治聖德記念學會會則」第十二條『明治聖德記念學會
- 研究紀要』第一輯[昭和五十一年]。昭和二十九年]、小林健三『加藤玄智博士の学績」『神道生の風格」『学校教育と成層圏の宗教』外篇[幽顕社田辺勇「学田拾穂 加藤玄智博士・宗教研究の学系と先田辺勇「学田拾穂

17

(8) 『幽顯』第三十二巻五月号[昭和十七年]によれば、加統により設置している。その趣意書は、左のとおりでああが、研究会であった藤玄會とは別組織と考えて良いであるが、研究会であった藤玄會とは別組織と考えて良いであるう。

藤玄塾創立趣意書

心境と經緯とを披瀝する。冀くば大方諸君子の賛同を賜む、率先して如上の學生に安らかなる勉學所を保證するし、率先して如上の學生に安らかなる勉學所を保證するとして、先づ城西幡谷の私邸を、無償開放し、都下學生として、先づ城西幡谷の私邸を、無償開放し、都下學生として、先づ城西幡谷の私邸を、無償開放し、都下學生として、以て本塾を創設し、自ら其總監に献身奉仕し、滅私びて職域奉公の實を舉げんとするのである。仍て之を余の姓名に因んで藤玄塾と呼び、創立費及經常費若干金をも寄附し、聊か教育上より現下國下社會の新状勢に對應する公益に邁進せんことを期した。如上余の本塾創立の書蔵を慶祝

管見でよ、月台ย悪己会學會『會最』ニバ、目こ虫1 藤玄塾創立者 文學博士 加藤玄智 敬白子時 昭和十七年三月十五日 新嘉坡平定の日

はらんことを。

19

君畧歴」『明治聖德記念學會紀要』第二六号[大正十五 た、という。 益を感じ、 が建國思想の本義」という講演を聞いて、その中身の有 ていたが、後に陸軍士官学校教授であった加藤玄智の「我 のゆえであり、今後その教育をどうしたらよいかと考え 奉職中、「日露戰争優勝の原因は我が國民精神の優越 発起人の一人であった宮川仁蔵は、陸軍士官学校の副官 會理事及會計監督をも務めた功労者である。又、同じく 家であり、學會の基本財産への寄附をはじめとして、學 る最も古い『會報』である。なお、學會創立の発起人の 管見では、 一人であった藤崎三郎助は、 加藤に希望して単行本として出版してもらっ 明治聖德記念學會『會報』二が、目に触 藤崎については、「故本會理事藤崎三郎 加藤の知人で理解ある実業 がれ得

の設立を回顧して」『明治聖徳記念學會紀要』第三八巻 [昭年]、宮川のエピソードについては、「明治聖徳記念學會

- 荒井泰治、金子三四郎の十名。藤玄智、宮川仁蔵、齋藤七五郎、別府金七、高橋之賢、②) 創立実行委員は、藤崎三郎助、狩野謙吾、林博太郎、加
- (21) なお、紀要の第一巻から第六十巻までの論文題名は、明治聖徳記念學會のウェブサイト http://www.mkc.gr.jp/seitoku/に掲載されている(加藤玄智博士記念学会『神遺研究紀要』、復刊『明治聖徳記念學會紀要は、「専門家の特殊研究發表を主」とし、「所載論文中特に有力なるものは本會と協力の下に日本亞細亞學會は、之を英譯してTransactions of the Asiatic Society of Japan に於て公表すること」になっていた。明治聖徳記念學會紀要は、明
- 等を参照。 の業績」『明治聖徳記念學會紀要』第四二卷[昭和九年](22) 星野日子四郎については、加藤玄智「故星野日子四郎君

學幻世紀COE研究員としての成果の一部である。 頂いたことを心より御礼申し上げたい。なお、本稿は國學院大意學會事務局の佐藤一伯氏に、資料供覧等、様々な面でお力添※本稿作成において、明治神宮教学研究センター内明治聖徳記

紀COE研究員)(國學院大學大学院博士課程後期在籍、國學院大學21世